

1. 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2970102634		
法人名	社会福祉法人 奈良苑		
事業所名	学園前西グループホーム(2階春日)		
所在地	奈良県奈良市二名3丁目1148		
自己評価作成日	令和4年7月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/29/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JizyosyoCd=2970102634-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 Nネット		
所在地	奈良県奈良市高天町48番地6 森田ビル5階		
訪問調査日	令和4年9月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

半年の間に2名の入居者の看取りを行った。偲びのカンファレンスを行うことで職員の気持ちも穏やかな形になっているように感じる。入れ替わりで新規の入居者もあり苑での生活に慣れるまでは周辺症状も多々見られ、慌ただしい場面もあったが、徐々に落ち着きを取り戻しており現在進行形ではあるが概ね生活リズムが整っている状態となった。他の入居者についても高齢化、ADLの低下や認知症の進行が著明ではあるが変化を見逃さず、事故防止に努めておりQOL維持につなげている。面会や外出の機会が減り、制限のある生活の中で入居者本人に楽しんで頂き、家族様に安心して頂けるよう今後も検討を重ねていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

運営法人は、特別養護老人ホーム、デイサービス、小規模多機能型居宅介護、ケアハウスなどの高齢者介護事業だけでなく、保育園、子育て支援事業も運営している。グループホームは、建物2階から4階にかけて3ユニットある。利用者を敬い、自分らしさを大切し、より良いサービス提供のため、現場職員のチームワークや一体感を大切にされている。看護師が常駐し身近に対応してくれるので、利用者の安心につながっている。同一敷地内に特別養護老人ホームもあり、グループホームの建物とつながっている。現在のコロナ禍では利用者や職員の感染には特に気をつけており、オンラインの活用や面会室を設けることで対応している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

※セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	寮母室に運営理念を張り出しており、会議などを通じて話し合いながら、実践に向けて取り組んでいる。	利用者が尊ばれ、自分らしく楽しく過ごせる内容の法人の理念をホームの事務所に掲示し、会議でも問いかけ浸透を図っている。事業所として十分にできていないと感じることもあるが、諦めることなく実践できるよう努力を続けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルスが流行し感染予防のため、外部との関わりに制限がかけられている。集団での会合が難しい状況である。	自治会への利用者の加入は任意で、事業所で回覧板や広報も読むことができる。加入者には敬老の日にプレゼントが届いたり、小学校で開催される福祉大会への招待状が届いたりする。毎週月曜、移動販売車が来る。コロナ禍により、地域との交流が乏しいことは否めず、コロナ禍の終息が待たれる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	令和3年度の運営推進会議はコロナウイスの影響で対面ではなく書面という形をとり発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	食事や認知症をテーマに資料を作成し、職員を中心に話し合いを行い、意見交換からサービスに繋がっている。	コロナ禍で運営推進会議開催の可否を市に伺い、この1年は書面での開催となっている。家族の要望は面会時に聴くことができるが、地域の方からは聴けていない。議事録は各ユニットに置き、全職員が見ることができるようにしており、意見交換することもある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者、ケアマネジャーなどが相談窓口となり、常に情報交換を行っている。	市との連絡は、ケアマネジャーか管理者が行っていて、事故報告、困難事例の相談、介護保険関係手続き、運営推進会議議事録等の提出などを行っている。生活保護課からの問い合わせがあるが、現在、生活保護の受給者はいない。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に身体拘束廃止委員という形で事例検討の場を設けている。実際に身体拘束は行っていない事が確認されている。	現在、身体拘束の事例はない。年2回、事業所の全職員対象に勉強会を行っており、3ヶ月に1回、身体拘束適正化委員会を実施している。玄関の出入り、エレベーター利用には暗証番号が必要となっているが、利用者が閉塞感を感じないよう努力している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	上記と同様に取り組んでおり、職員のメンタルケアも含めて身体拘束や虐待に至らないように注意深く対処している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者などは研修に参加している。研修内容を活かし、充実したサービスを提供できる体制を整える。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前には書類を一つひとつ確認しながら説明を行い、理解、納得をしていただく中で契約を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ感染予防のため面会制限を行っている。流行の状況に応じて体制を微調整している。面会時には生活状況を伝え、ご家族からの希望を聞くようにしている。	コロナ禍でも法人施設にコロナ感染者がいなければ、月1回面会することができる。窓越しでマイクや電話を使って、またはオンラインで面会することができ、その際に、家族の意向を職員が伺っている。事業所からも電話で連絡を取り、意向を伺うこともある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	現場職員はリーダーへ、リーダーは主任へ、主任は管理者へという流れの中で、日々の情報交換を行っている。	毎月の会議は各ユニットで行い、原則全職員が参加して月に2・3回行っている。内容は、認知機能低下が顕著に見られる方への対応、レクリエーションのこと、日光浴についてなど利用者の介護についてが多い。職員の個別面談は年度末と半期後の年2回、ユニットのリーダーと行い、年度末には来年度の職員個々の目標を立てている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年1回各階リーダーもしくは主任と各スタッフの面談を行い、個々の悩みなどを聞き取り管理者へ報告している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	フロア会議の日程を数回に分けて取る事で、少人数で勉強会を開催。また、ユニット内においても情報共有・意見交換を意識し、新規入居者の対応や困難事例、看取りのケアなどについての話し合いを重ねた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルス流行・感染予防のため交流を行えていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時から本人の要望に合ったサービスを提供するために、面接段階で意見交換を行っている。また実際に入所してから本人のニーズを探り、安心を確保できるよう日々努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面接時にご家族からの要望を伺っている。その際、ご家族から様々な意見が出るよう配慮している。その後も面会や電話連絡などを通じて、ニーズを共有し、信頼関係が築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面接の中で多方面からのアプローチを行い、多くの情報を得られるよう努めている。またアセスメントや面接用紙もニーズを引き出しやすい書式にしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の気持ちや生活スタイルを大切にし、人生の先輩として尊敬し、共により良い生活になるように協力合っている。昼食は席を並べて同じものを食べ、そこから会話に繋げている。家事も出来るだけ一緒に行うようにしている。協力して園芸作業に取り組む姿も。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会制限により、以前に比べるとご家族と顔を合わせる機会は減っている。現場では入居者の様子を伝える手段としてケース記録に意識を向け、報連相という形でケアマネに伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	会話に置いて、本人の馴染みの人や場所を意識して話題にしている。また本人、ご家族からも情報を得られるようヒアリングに努めている。	施設に感染者がいなければ、月1回、感染対策を工夫し面会できるようにしている。利用者のこだわりの化粧品、ご飯の供、好物などを持って来てもらっている。自分で携帯電話を所持している方もいるが、家族と電話で話をしてもらうこともある。手紙のやり取りをする方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	周辺症状がある中でも大きなトラブルに発展することなく日常生活を送れるよう支援している。入居者同士の相性、特性を把握し、笑顔を引き出せるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	これまでの関係を断ち切ることなく、継続的に関わり、ご家族からの相談にも応じるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	QOLの維持・向上を念頭において本人のニーズを探り、穏やかに過ごして頂けるよう支援している。またケアプランチェックシートを作成し、全職員が継続的に実践できるようにしている。	入居時に、事業所独自で作成した「バックグラウンドアセスメント」書面に、生活歴、趣味趣向、愛称、日頃の口ぐせや行動など家族に記入してもらっている。入居後は、日々の言動から、その人らしさや思いの把握に努めている。写真を撮ることが好きな方が、意欲が乏しくなったことがあり、意向の把握に努めながら家族の協力も仰ぎ、写真の整理と専門医への受診投薬で緩和したこともある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人やご家族との会話を通じて、本人のこれまでの人生についての把握に努めている。また個人ファイルに生活歴などの情報が綴じられ話し合いに活用している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人との関わりを多く持つように努め、日々の変化に対応している。口頭またはノートを使って職員同士で情報交換を行い、全体的な本人の現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者がケアプランの原案を作成し、担当者、リーダー、ケアマネジャ、管理者でカンファレンスを行い、ケアプランを作成している。ケアプランは家族に説明し、同意を得ている。モニタリングは毎月末に担当者が行い、3か月ごとに見直しを行っている。家人様にも参加を働きかけている。	利用者や家族の思いと生活上の課題をもとに、話し合っケアプランが立てられている。作成後、家族に説明し署名捺印をもらっている。ホーム独自のケアプランチェックシートがあり、1日の過ごし方が記載しており、介護内容の職員への周知と統一を図っている。モニタリング結果をもとに、3ヶ月毎にケアプランを更新している。	利用者個々の思いやその人らしさを把握し、処遇内容の向上に努めておられるが、ケアプランには一部しか反映されていない。ケアプランの中に身体面のケアだけでなく、その人らしさが反映した喜びや楽しみを増やす具体的プランがあればさらに良いと思われる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日誌、個別記録、連絡帳などを活用して、ケアについての情報共有を図っている。また定期的に会議、ミーティングを行い、ケアの見直しなども行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	重度化により個浴の浴槽に入るのが困難な方は、同法人内の他部署へ機械個浴を使用する柔軟な対応を実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアによる演奏会などの催し物がある。また運営推進会議にメンバーとして、地域の方にも参加いただき、様々な協力をもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科、精神科、皮膚科、歯科の定期的な往診があり、経過報告などもその都度させていただいている。その結果はご家族に報告している。	かかりつけ医は、ほとんどの方が嘱託医の3診療所（それぞれ月1～2回往診及び必要時対応）から選ばれますが、他医を外来受診している方もいて、往診も検討の余地がある。歯科は歯科衛生士が週1回訪問し、必要時には歯科医が対応する。皮膚科、必要時に往診可能である。看護師が週5日、日勤帯で勤務し心強い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	専属の看護師がおり、その時々で対応している。看護師は会議に参加し、その都度専門的なアドバイスをもらえる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が安心して生活ができるよう、入退院時に病院関係者と情報交換を行い、医療機関との連携を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人、ご家族と話し合い、医師の意見も聞きながら、要望に沿えるよう努めている。実際に2名の方のターミナルケアをさせていただき、専用のノートを作ったり、振り返りも行って次に繋げていけるよう努めている。	重度化及び看取りの指針があり、入居時に説明している。終末期が来れば、病院、自宅、事業所等を選ぶことができ、事業所での看取りを望めば、「看取り介護・医療の同意書」を交わす。感染対策をして家族も付き添うことができる。この1年で事業所全体で6名の方を看取った。常勤看護師がいることも心強い。看取り後、偲びのカンファレンスを行い、看護師、介護職員が書面に体験や想いを記入し、全員で振り返る機会を持っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	部署での勉強会を定期的に行っている。夜間緊急対応マニュアルも作成し、内容も分かりやすく、またすぐ目に付く場所に配置してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人内で、避難訓練を年2回行っており、全職員が参加できるようにしている。避難マニュアルも作成されており、訓練の度に見直しもされている。また部署の勉強会でも、避難訓練や技術的な学びの機会を設けている。	年2回、火災の夜間想定での避難訓練を実施している。緊急時の手順マニュアルには、出火場所により、各フロアに必要な行動を記されている。地震や土砂災害については、勉強会を実施し全職員に周知している。備蓄用に、食料は1週間分、飲料水、ダンボール、布団も準備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方に合わせた、自尊心を傷つけない丁寧な声掛けを心掛けている。また居室の扉はその方の家の玄関と捉え、開きっぱなしにならないよう配慮している。	利用者を人生の先輩として敬い、呼名は苗字に「さん」付けをして敬語を基本とし、プライバシーの確保に配慮している。「お手洗い、おトイレどうですか」など丁寧な言葉使い、利用者の居室は「家」と考え、入室時にはノックと声掛けをしている。職員に不適切な言動があれば、その都度注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	イエスノーではなく、どうしたいかを答えられるような尋ね方を心掛けている。また言葉にして伝えられない方は、表情を注意深く観察しながら、本人の立場に立って判断している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床・就寝時間や食事排泄の時間は、その方の希望や生活のペースに合わせて臨機応変に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人やご家族から好みや要望を聞き、思い思いの服装を楽しんでもらっている。外出時には特に気を配っている。自身で洗顔できない方には、ホットタオルを用意して対応している。持参の化粧水やハンドクリームを使用される方も。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	得意料理や調理方法を教えて頂いたり、手作りおやつ企画では作業を手伝ってもらっている。昼食は席を並べて同じものを食べ、そこから会話に繋がっている。また、リクエストを聞いて日曜日の夕食会のメニューに繋げる事も。	朝食は夜勤者が作り、昼食と夕食は、ご飯と汁物をユニットで作し、惣菜は隣の法人施設の厨房で作られている。日曜の夕食はユニットで手作りしたり、お寿司などを買ってきたりする。週に1回はラーメンやうどんなどの麺料理を提供したり、月1回のイベント食や話題食を提供したり、誕生日会でケーキを用意するなど、利用者の楽しめる工夫がなされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重の増減や採血結果による健康管理に加え、各自の好みを把握し、一人一人が飲みやすいものを提供している。ストローをつけると良く飲まれるようになった方もおられる。チェック表に記録し、日々の変化を見逃さないよう対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを声掛けしている。自分で出来ない方は、職員が介助している。また週1回の歯科衛生士によるケアがあり、口腔ケアには力を入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表から排泄リズムを掴み、失敗の無いように調整している。パットの種類や当て方も職員間で話し合い、より良いものとなるよう努めている。ストックと汚物用ゴミ箱を用意することで交換動作が自立している方もいる。	3ユニットの入居者23名中、布パンツ利用の方13名、リハビリパンツの方4名、オムツの方6名である。夜間、居室にてポータブルトイレを使用している方もいる。利用者それぞれの排泄パターンを把握し、昼間は共用トイレに座って自然な排泄を促し、排泄の自立度向上に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日ヨーグルトを提供し、個別にプルーン・牛乳を提供して、自然排便を目指している。また運動や腹部マッサージも出来るだけ行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個浴にてゆったりと、職員とコミュニケーションをとりながら楽しんでいただいている。またその方に合ったシャンプーなどを使い分けている。拒否や体調の変化に合わせて臨機応変に入浴日をシフトして対応している。	入浴は、週2回できるよう支援している。同性介助を希望される方には対応している。入浴を拒否されたときは、職員を変えて声掛けしたり、シャワー浴や清拭で対応したり、日を変えたりすることもある。利用者として1対1でリラックスして話ができる良い機会となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者によって、昼寝の時間を設けている。また、クッションなどを使ってしっかりとポジショニングをし、ゆっくりと安眠できるよう努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルには処方箋があり、すぐに確認できるようになっている。不明点は看護師に尋ねることが出来、把握できる体制の中で提供できている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節に合わせた企画を考え、楽しんでいただいている。ベランダや玄関先に出るなど外気に触れる機会を設けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの影響もあり、現在は苑内の散歩やベランダでの外気浴、お茶会など。	コロナ禍で外出ができない状況にあるが、テラスに出たり、週1回の移動販売、ゴミ出し、洗濯物干し、テラスの花への水やりなど、個人差はあるが週1回位は外気に触れる機会がある。	コロナ禍でも少しは外気に触れる機会をつくられています。利用者の心身機能やストレスを考えると、庭に出る、テラスに出る等して、日に当たったり季節の変化を肌や目で感じたりできるような時間をより増やす取り組みが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、個人で金銭管理をされている方はいないが移動販売にて買い物に触れる機会を設けており、好きなものを買って頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の了解があれば、電話・手紙でのやり取りが出来るよう支援している。個別に携帯電話を所持されている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべくエアコンを使わず衣類にて調整し、季節を感じてもらえるようにしている。空気洗浄機や加湿器を使用し心地よい環境を整えている。またフロアには、すぐに休憩できるようにソファを設置している。また、季節感のある掲示物や、写真を張り出し整頓された環境づくりにも取り組んでいる。	リビングも廊下も広くて明るく、複数で座ったり1人で座ったりできる数種類のテーブルやソファがある。椅子は、座面にクッションを敷いたり、足元に台を置いて調整し、個々の利用者の身体に合わせている。壁面には季節が感じられる飾り付け、絵画、利用者の写真や作品が飾られ、暖かい雰囲気が感じられる。テラスにも出られるようになっていて、椅子が置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う者同士にて、食卓の座席を決めさせてもらい、職員が様々な配慮をして、トラブルなくつるげるよう工夫している。入退居のある中で、利用者の関係性の把握に努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	実際に使っておられた家電や家具・服を持ち込んで頂いている。家族の写真も置いておられ、居心地の良い空間となるよう配慮している。	居室の広さは約8畳で、洗面台、エアコン、カーテン、トイレ(一部ない)が設置されている。ベッドは自宅から持ってこられたり、レンタルされており、床にウレタンマットを敷き布団で寝る方もいる。利用者ごとに使い慣れた家具を持ち込み、お気に入りの空間をつくっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	雑誌や新聞、DVD観賞などを提供する事で集中して意識を向けられる。メリハリのある生活につながるよう支援している。		